

樹種名	ニガキ	
科 目	ニガキ科	
学 名	<i>Picrasma quassioides</i>	
分 布	北海道、本州、四国、九州に分布し、低地の林内に生育する。日本以外では、東アジアの温帯から熱帯の朝鮮、中国、ヒマラヤに分布する。	
樹木特性	全ての部分に強い苦味がある木で、名前の由来ともなっている。 ニガキの心材は黄色がかっており、木目がはっきりしているため、細工小物などに使用される。軽量だが、堅質で、加工がしやすいため、細工物の材料に使用される。	
用 途	器具材、下駄、薪炭、細工物の材料として利用。樹皮は生薬、葉は煎汁を作り殺虫剤として利用。	
自生本数	1 本	
特 徴	【樹形】 落葉高木で、樹高は 6~8m となり 12m 以上になるものもある。 葉は枝に互生し、奇数羽状複葉で、長さ 15~25cm になる。小葉は 7~13 枚が対生し、形は卵状長楕円形で、先端は尖り、基部は鋭形。小葉の長さ 3~7cm、幅 1~3cm で、縁は鋭鋸歯になる。 花期は 4~5 月。葉腋から花序軸を出し、集散花序の小さい黄緑色の花を多数つける。雄花序には 30~50 個、雌花序には 7~10 数個の花がつく。花弁は 4~5 枚で、長さは、雄花が約 2 mm、雌花が約 3 mm になる。果実は 2~3 個の分果となり、緑黒色に熟す。 樹皮はなめらかで暗褐色、材からこの樹皮を取り除いて乾燥させたものは、生薬の苦木（にがき、くぼく）として知られ、薬用のほか殺虫剤の材料としても用いられる。	  
試験地での様子	自生木として、1 本が現存している。	
被 害	特になし	

【現存率】

平成 26 年に毎木調査をした結果、1 本が自生木として現存している。

【根元・胸高直径】

平成 26 年に毎木調査をした結果、胸高直径は 14.58 cm であり、順調に成長している。

【樹 高】

平成 26 年に毎木調査をした結果、樹高は 9.26m であり、順調に成長している。

《プチ情報》

和名は、葉や幹、枝などすべてがとても苦いところから、和名もそのままニガキ（苦木）と名づけられました。その苦味の故に、アイヌの人たちも苦い木を意味している「シウニ」、秋田では「クスリギ（薬木）」、鹿児島では「ニガッ」などと呼んでいる。樹皮が剥がれやすい 7 月頃が適期となり、全株に強い苦味があるが、老木になると苦味は弱くなるようです。

乾燥した木材を削ったもの、葉を乾燥させたもの等を湯などで煮出して煎剤をつくる。この煎汁（せんじゅう）は殺虫剤として使用され、農作物へ散布したり家畜へ散布して使用する。効果は農薬より劣るが、天然の殺虫成分のため有機農法などで使用されることがある。

材から樹皮を剥ぎ取り、乾燥させると日本薬局方収録の生薬の苦木となる。苦木にはクワッシンを始めとする苦味成分が含まれ、強い抗菌作用や殺虫作用を持つといわれる。主に苦味健胃薬として用いられ、太田胃散などの薬に配合されている。ただし、伝統的な漢方方剤では、まず使わない。

材質は、加工のし易さから多くの範囲に使用されてもおかしくは無いが、汁椀などの食器にすると使用中に苦味成分が漏れ出してしまうため使えず、臭いも少しあるため、狭い範囲で使用されている。

